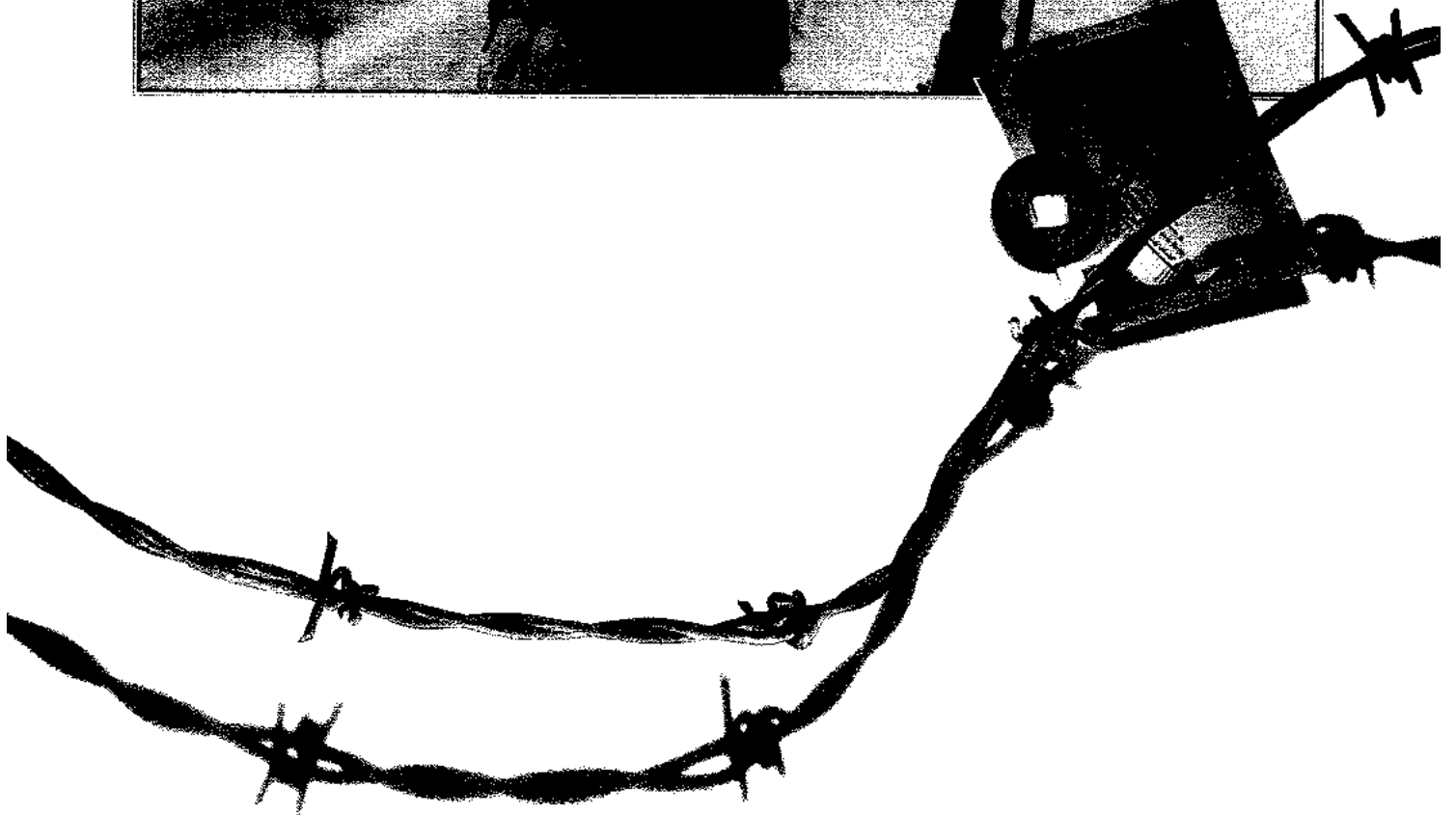


カウラ集団脱走

と捕虜収容所について



カウラ集団脱走

と捕虜収容所について

1944年8月5日、深夜午前1時50分、冴え

渡る月明かりの中、現代軍事史上最大の捕虜脱走事件が、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州の中央台地にあるカウラで発生した。1000名を超える日本人捕虜が、オーストラリア

第22守備隊の警備兵に自殺攻撃を仕掛けた。

彼等の胸中にあったのは、捕らわれの身の不名誉が、今や戦闘で死ぬことで雪辱できるという思いだった。



それぞれ約300名からなる4グループは、粗雑な武器を手にし、鉄条網とヴィッカーズ機関銃の火線に向かって突進した。野球のミットあるいは毛布や上着だけで身を防護し、戦友を人間梯子にして鉄条網を乗り越えた350名を超える日本人捕虜は、闘志もあらわに自由を目指した。

1

日本が歩んだ戦争への道

2

カウラ捕虜収容所

—その存在とオーストラリア
捕虜収容所制度における役割—

3

収容所の生活

—ある警備兵の考察—

4

収容所内の情報収集

—収容所における情報の重要性—

5

集団脱走前

6

集団脱走

7

再収容作戦

8

カウラにあった軍事訓練所 1940 - 1945

9

恥辱からの旅立ち

行動学習ノート

その他

1

日本が歩んだ戦争への道

—軍国主義の伸張—

1944年にカウラで起こった悲劇を理解するためには、日本人、特に日本人男性の戦争に対する態度について理解することが役立つと思われる。

元兵士で「進め少年兵よ」の他、初期オーストラリアの海軍史に関する数冊の著訳があるジェームズ・ヘンダーソンは、何故日本が戦争への道を行きだかについて、次のように書いている。

1853年、マシュー・ペリー提督は重武装した蒸気船からなる米国艦隊を率いて東京湾に来航し、数百年続けた鎖国を解き、通商のため開国せよ、と日本に要求した。

艦隊の大砲による派手なデモンストレーションを受けて、12世紀以来実質的に日本を支配してきた軍事政権である将軍職は、開国するかどうか天皇にたずねたが、天皇は開国要求を受け入れざるを得なかった。

このようにして、軍事封建的な櫛の戸は開かれた。富裕な地主である君主に伝統的に仕えてきたサムライは、神である天皇の名の下に、多くの暗殺・放火・そして苦悶のハラキリ自殺を行い、夷狄の駆逐を誓い、その混乱は20～30年続いた。

しかし時既に遅く、西洋諸国はアメリカの先例に続いた。しかしながら、長期に亘る夷狄駆逐の秘密計画は策定されつつあったのだ。その計画の骨子は、日本は列強との関係を確認し、それらの諸国から学びつつ国内工業力の基礎を固め、「国家的運命の達成」のために必要な軍事力をこっそり展開するというものだった。

日本の神話によると、天照大神が日本の八つの島（大八洲、日本国の古称）を創造し、彼女の孫のニギノミコトが地上に降臨し、そこで彼の直系の神武天皇が、紀元前660年に最初の人間天皇になったとされる。その神

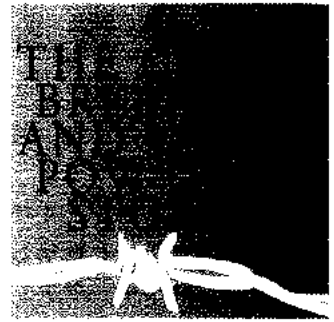
話は8世紀頃に日本人が編纂し始めた成文史に見事に取り込まれた。現在の天皇アキヒトは、最初の天皇から万世一系絶えることのない125代目の継承者とされている。

日本人は、自分達の天皇の正当性を信じてきた。しかし、元アメリカ駐日大使エドウィン・O・ライシャワーは、次のように書いている。「日本史の大部分において、名目上の支配者または支配グループは、実際には大抵他の者やグループの手先である。」

12世紀に、日本の武家階級の指導者が、「夷狄の侵入に対する偉大な征服者」を意味する征夷大將軍という称号のもとに、日本の実質的な支配者になった。

将軍は、天皇を飾り物にして、国民を統治出来ないような地位に奉り上げて天皇を押し下げた。

19世紀後半、新生日本はフランスから軍艦を購入して、帝国海軍を創始した。そのためフランスは日本に造船所を建設し、英国は戦艦と巡洋艦で構成する艦隊を供給した。ドイツとフランスは、日本が近代的な徴兵制度を創設する手助けを



した。

1894年、新生日本は、清国との戦争で中国をアヘン市場にして富みを搾取する英国政府の先例を含め、植民地を持った西欧の列強から学び取ったことを再現してみせた。





日本は朝鮮を侵略し、中国に宣戦して満州に侵入した。警戒した西洋列強は、撤退するように日本を説き伏せた。だが、4年後にアメリカはスペインと戦争し、キューバの他、ハワイ、グアム、フィリピンといった太平洋を横断する一連の島々を奪取した。それから1901年、日本は列強に加わり、中国北部において義和団の乱を鎮圧した。

1904年、日本はロシア海軍基地ポートアーサー（ロシア側呼称。注：旅順）を奪取し、ロシア皇帝がその屈辱に仕返しするため、はるばるバルチック艦隊を派遣した時に待ち受けて、その多くを撃沈、捕獲した。

1910年、日本は韓国を併合したが、1914年、第一次世界大戦が勃

発すると、英国はドイツ皇帝との戦争に、限定された作戦以外には戦闘に参加しない日本を、喜んで同盟国として受入れた。

1931年までに帝国陸軍は満洲で兵力を増強しつつ、その鉱業資源や豊かな穀倉地帯を強奪しようとしていた。

もはや軍国主義者は手に負えなくなっていた。

1937年、日本軍は降伏してきた5万人の中国兵を殺害し、悪名高い「南京のレイプ」により、少なくとも20万人の一般市民を虐殺した。

これは日本にとって、事実上の第二次世界大戦の開始だった。もっともその中国との戦いの端緒となる事件(注：盧溝橋事件)は、東京で計画されたというよりも多分に偶発的だったと言われている。

日本政府は、東南アジアを征服

する計画を立て、様々な植民地体制の代わりに「共栄計画」を掲げたが、これは白人支配者の統治よりも搾取的で不人気なことが分った。アメリカとオランダが凶暴になった日本に石油の輸出を禁止したことにより、帝国政府は1941年12月8日、絶望的な賭けに出た。

トラ、トラ（虎、虎）という真珠湾攻撃成功の無電暗号は、1853年のペリー提督が与えた国家的屈辱に対する復讐の一部だった。

著者ジェームス・ヘンダーソンは、1942年8月から9月にかけて、バブア・ミルン湾の戦闘当時は、若い通信兵だった。

彼が最初にゼロ戦パイロットの柿本円次に出会ったのは、そこだった。柿本は湾上空で撃墜された後、バブア人に捕らえられヘンダーソンに渡されて捕虜となった。

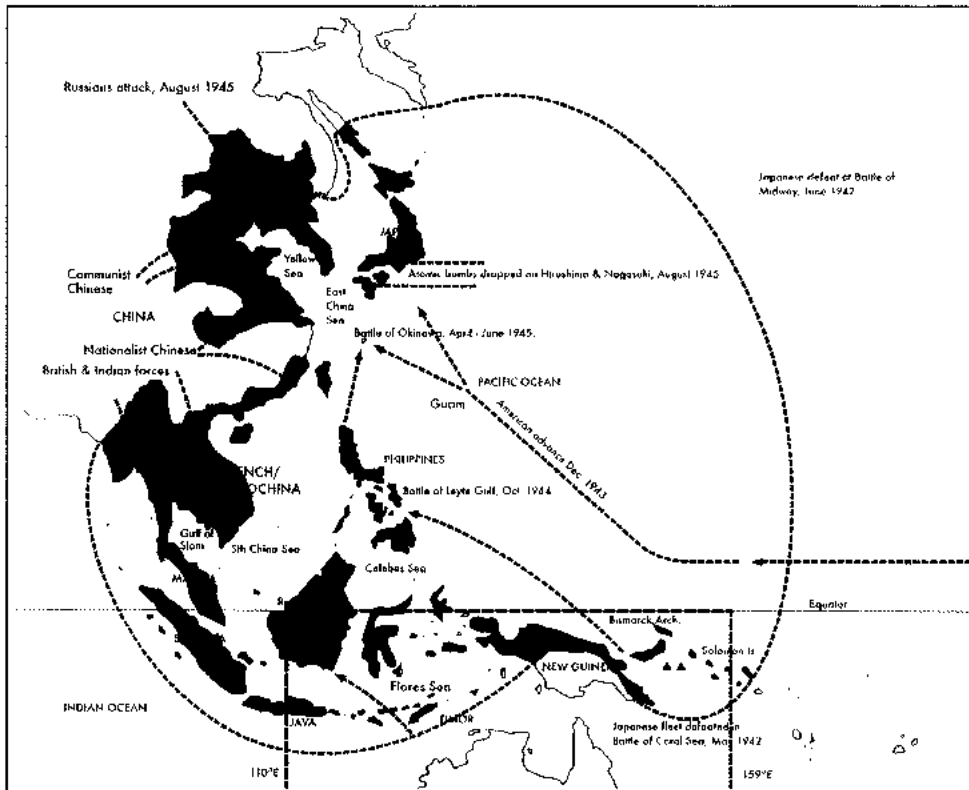
1992年、西オーストラリアのニ

ッドランズにある西オーストラリア大学出版局が刊行した彼の本、「進め少年兵士よ」を書くための調査にあたって、戦後日本へ行き、柿本を友人として探したが、彼はカウラ捕虜収容所へ送られ集団脱走のときに首吊り自殺を遂げたことを知った。

ヘンダーソンは柿本の墓をカウラで見つけた。このことから、彼は戦争に反対する女性が永遠の愛を求める感動的な物語を書くようになった。ヘンダーソンは柿本を記念して、カウラに桜の木を植えた。

日本軍の戦闘 1942-45

戦闘は北部及び東部オーストラリアに対する広範囲にわたる攻撃をも含んだ



2

カウラ捕虜収容所

—その存在理由とオーストラリア捕虜収容所制度における役割について—

カウラは、第二次世界大戦直前までは3500人の小さな田舎町だった。その静かな風景は急激に変わり、平和な雰囲気は戦争の恐怖によって破壊されることになる。

カウラ収容所は、第二次世界大戦中オーストラリアにあった28ヶ所の抑留施設のうち12番目の収容所で、捕虜や敵国籍人の監禁・抑留所ネットワークの一部だった。第二次世界大戦中、最初の収容所は、1940年、ニューサウスウェールズ州のリベリナ地区のヘイに建設された。ニューサウスウェールズ州に建設された他の収容所には、リバプール、ペリマとヤンコがあり、また、ヴィクトリア州にはタチュラ、マーキソン、ミルフォード、ローヴィルとグレイタウンがあった。その他の州にも収容所が建設された。(例えば西オーストラリア州のマレナップやハーヴィー、南オーストラリア州のラブディーやクイーンズランド州のグレイズオンが、それである)。ノーザンテリトリー州だけは敵地に近いため、このような収容所はなかった。

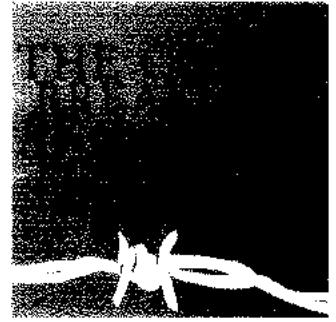
1938年カウラ市内
ゲンダル通り



これらの収容所には、3種類の収容者がいた。すなわち捕虜、永住敵国籍人、一時在留敵国籍人である。最後の者は、オーストラリアへの旅行者、船員など戦争勃発時にオーストラリアにいた者である。

オーストラリア国内収容所の収容者の民族構成は非常に多様で、下に示す国の男性・女性・子供がいた。

それぞれの収容所では、異なった国籍の収容者を抱えていた。イタリア人は北アフリカで捕虜になってから、インドを経由してオーストラリア中いたるところの収容所に入れられた。ドイツ人は基本的にはマーキソンやグレイタウンを含むヴィクトリア州のいくつかの収容所に限られていたが、その他、西オーストラリア州のマレナップにもいた。オーストラリアに連れてこられた日本人の大部分は、高度の監視と地理的な隔離の必要上ニューサウスウェールズ州のカウラやヘイ収容所に入れられた。日本人の一般市民は、危



険がより少ないとみなされ、南オーストラリア州のラブディーやヴィクトリア州のタチュラに送られた。

捕虜や抑留者は様々な役割を演じ、地域住民との交流も違ったものになった。

カウラ収容所のイタリア人は、地域社会に直接的、積極的に貢献し、農業、耕作、果樹園など広範囲にわたって働いた。仕事の範囲や種類は地域の要請や捕虜の信望次第だった。イタリア人はその協力的な気質のため、彼等の労働力は比較的十分に、かつ弾力的に使用できた。当初、日本人と労働グループを作ることも試されたが、日本人の攻撃的性質が保安上問題を起こし始めたので、その試みは直ぐに断念された。

アジア人・ヨーロッパ人

日本人	4772人捕虜	534人船員
朝鮮人	56人捕虜	
中国人	74人捕虜	
台湾人	61人捕虜	
インドネシア人	33人捕虜	
ジャワ人	207人捕虜	
イタリア人	18164人捕虜	226人船員／抑留者
ドイツ人	1410人捕虜	248人船員／抑留者
ルーマニア人		1人抑留者
フィンランド人		22人抑留者



野球をする日本人捕虜

したがって、彼等は収容所が企画したどんな仕事にも役立たなかった。

一方、抑留者は、捕虜よりもっと良い境遇を保ち、地域社会とより自由に交流した。

「機を見て脱走すべきだ」という倫理は、捕われて監禁された兵士に共通な行動様式だったが、オーストラリアにおける捕虜の生活は、海外で同様に捕虜となった者とは多くの点で違っていた。オーストラリアにおける捕虜は、例外なく、ジュネーブ協定を強く固守する収容所ネットワークにおいて、生活を楽しく送ることが出来た。彼等は多くの種類と量の食事を享受し、しばしば自分たち自身で準備し、調理する事もできた。

彼等は、必要な医療を受け、同意によってのみ労働を要求され、快適な住居や衣類が与えられ、リクリエーションや時には文化活動も可能だった。

それにも拘らず、現実には捕虜の間での暴力事件や死亡事件

は、頻繁に起こる小競り合いから、カウラ脱走事件のようなものまで起こった。

公式軍事記録によると、全オーストラリアの捕虜収容所で起こった死亡事件は次の通りである。

これらの統計に加えて、別の資料によると、収容所内の暴力や騒乱の例が見られる。1945年6月、日本人がハイ収容所で暴動を起こし、5人が入院した。

これに先立つほぼ12ヶ月前、これもハイで、2人の捕虜が刺殺され、そして他の日本人も重

傷を負った。

イタリア人のファシスト同調者もまた収容所内で問題を起こし、ドイツ人のナチ党员、日本人、台湾人、ジャワ人の間の衝突も、オーストラリアの収容所全体で報告されている。捕虜の「トンネル掘り団」による脱走未遂も数多く報告されている。

しかしながら、カウラでの集団脱走事件は、全オーストラリア収容所の中で最大規模の暴動事件だった。



ドイツ人	4人	自殺
	1人	警備兵による射殺または刺殺
	3人	自然死
イタリア人	15人	自殺
	1人	警備兵による射殺または刺殺
	85人	自然死
日本人	43人	自殺
	199人	警備兵による射殺または刺殺

3

収容所の生活

—ある警備兵の考察—

著者は、ウォーリー・マッケンジーに感謝し、彼の意義ある貢献と彼が書いた小冊子「カウラ集団脱走の回顧」に対し謝辞を述べる。この小冊子はカウラ旅行者情報センター、カウラ日本庭園で入手できる。

その小冊子の一部をここに引用する。

カウラ捕虜収容所にいた多くの警備兵は、B種の兵士だった。すなわち兵役には適するが前線での戦闘には不適な者である。彼等の中には、「本分を尽くす」ことに一生懸命であっても、健康が「A1」の状態でなかったり、年を取り過ぎていたりする者だった。

彼等の多くは、第一次世界大戦において、西ヨーロッパの塹壕や、北アフリカと中東の砂嵐の中で、勇気と奮闘振りを示してきた。彼等の息子には、太平洋において日本軍と戦っている者もいて、息子が早く家族の元に帰って来るように、収容所で働いて、戦争に勝つ手助けをしていた。

カウラ収容所では、警備兵は4地区の一つに割り当てられ、そこで更に二つの勤務時間帯に別れた。警備兵は、毎日午前8時に交替し、それぞれが2時間交替で監視塔に配置された。(勤務2時間、休憩4時間)。

「総じて、警備兵にはいい奴が多かった。彼等は戦闘ではなく仕事をするためにそこにいたが、他の兵士と同じ様に、戦争の一端を担っていたのだ」

日本人捕虜は、「敵に収容所の運営をできるだけ困難にさせる」という捕虜の義務の典型的な例を示した。彼等は最早戦うことはできなかったのだから、着実に非協力的で問題を起こすことを選んだ。

その結果、収容所生活は、特にB地区において、非常に不快なものになった。

しかし、収容所生活には「より快適な部分」もまた多くあった。イタリア人は、収容者数の

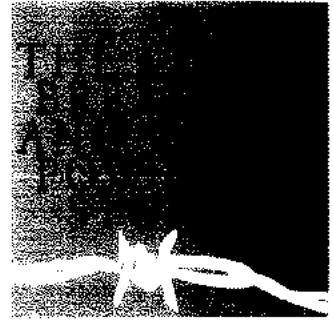
かなりの部分を占めていたのだが、一般に、ほとんど問題を起こさない幸福な集団だった。だから、A地区とC地区の雰囲気は、大変くつろいだものだった。

収容地区の外では、毎日朝の10時から夜の10時まで、警備員室でポーカーが行われ、中隊対抗のテニスやクリケットの試合があった。クリケットのチームは、収容所外のチームと試合をするため、収容所要員の中から人選して作られた。また、収容所要員は、折にふれて強いフットボール・チームを結成した。一日の終り特に給料日には、下士官食堂でビールが振舞われた。コンサートやダンスは、YMCAホールで行われた。

イタリア人捕虜の多くは農民や農場労働者で、休日には干草を作ったり、エッジェルの工場でかばんを縫ったりする仕事を頼まれることがあった。地域の人々との間には、よい友情が芽生えた。

オーストラリア軍の将校は総じて捕虜から賞賛、尊敬された。

ウォーリー・マッケンジーによると、彼等は困難な状況下でも兵士を指導できる素養を持っていた。彼等はB地区司令官だったラムジー少佐を、「僧侶のよう



な人で、公正で、ほとんど父親のように捕虜を取り扱ったことが、その後日本人に、カウラに対して明らかな愛情を待たせることに大きく貢献したことは、間違いない」と考えている。



ウォール・マッケンジーが1994年記念集会で語る。50年前と同じようにその夜は寒かった



またマッケンジーは、集団脱走の夜、彼の仲間の警備兵が示した勇気や、兵士としての行動にも、多いに敬意をあらわしている。

その夜死亡したハーディー、ジョーンズ、シェパードの各一等兵や、翌日殺害されたドンカスター中尉とともに全警備兵は、敢然と死に立ち向かった。

偉大な勇気、自制心そして道義をわきまえた不屈の精神

自分達は英雄であったと自慢する警備兵はほとんどいないが、あの夜の彼等の行動は、個人的かつ集団的な勇気ある行動だった。事件発生後も、彼等の行動には、偉大な勇気、自制心そして道義をわきまえた不屈の精神が要求された。

多くの警備兵には、日本人の遺体を集めて名簿を作り、再収

容された者を無事帰国させるため、治安を維持する責任があった。

彼等の鬱積した不満を考えると、このことは決して簡単なことではなかった。なぜならば、東南アジアの日本側の捕虜収容所における戦友や家族に対する非人道的な虐待、脱走時に死んだ4人の仲間のが、心にわだかまっていたからだ。その怒りと傷心にもかかわらず、警備兵は人道的、かつ職業意識を持って職務を遂行した。



カウラ市内目抜き通りのスクエア公園にある集団脱走時に殺害された4人のオーストラリア将兵に捧げるレリーフ
ニューサウスウェールズ州出身のアントニー・シモンズ作品

4

収容所内の情報収集

—収容所における情報の重要性—

捕虜収容所での情報将校の仕事は、「地に耳を当て、形勢を見る」であった。情報部の隊員が収容所に配属されてはいたが、訓練と食事以外は独立していた。彼等の目的は保安上の視点から、捕虜の行動について情報を集め、情報部と同時に、収容所の司令官にも報告した。

情報部門は、情報の収集と警備隊の将校や兵士、特に通訳との間に良好な関係とバランスを保つことが要求された。言い換えれば、彼等はゲシュタポ（注：ナチスドイツの秘密国家警察）のような秘密警察ではなかった。兵士による保安上の規律違反や軍用備品の認可のない使用の取り締まりは、野戦保安部の領域であり、陸軍情報部の仕事ではなかった。

カウラ捕虜収容所には、A、B、C、Dの4地区があって、本来それらのうちの3地区にイタリア人捕虜を（ファシストと反ファシストの2党派があった）、4番目の地区に抑留者(民間人)を収容していた。

彼等の多くは、カウラに来る前はクイーンズランド州に抑留されていた。抑留者に家族から小包が届くと、その家族の住所は、その抑留者が失踪した場合に備えて書き留められた。陸軍情報将校のライオネル・ボアマンは、抑留者の何人かはニュー・サウスウェールズ州のシルクウッドから、その他の者は、彼がかつて住んでいたイーストウッドから来ていたのを覚えている。

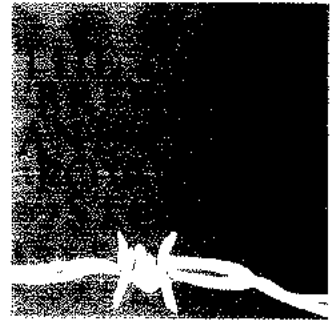
「戦後、私は当時果物

店を経営している抑留者の一人に会った。彼と握手をして思い出を語った」

ボアマンは次のように回想している。

「私は召集されてニューギニアへ行ったのだけれど、幸運なことに、弁護士であることが分かって情報部に配置替えになり、カウラに送られて准尉に進級したのです。そこで、私は担当情報将校が、第一次世界大戦で軽騎兵だったケイン大尉であることを知ったのです」、「我々は司令部にいました。それぞれの地区に軍曹が一人配置されていて、イタリア語を通訳する軍曹を使っていました。4人の軍曹は中東から帰還した者で、それを示す色章を誇らしげにつけていました。毎週、彼等は私にレポートを提出し、私は、一本指でタイプして、ヴィクトリア兵舎のプレントイス大佐宛のレポートに纏めました。これは、ニューサウスウェールズ、ヴィクトリア、南オーストラリア各州の収容所で、我々が得た出来事に関するレポートの中に組み入れられました」、「イタリア人は平和的な集団で、カウラは北アフリカで戦うよりずっといいと確かに感謝していました。彼等は、歌い、演奏し、集団労働で捕らえたウサギを料理したり、料理用の干しぶどうからジャングルジュースを作ったり、生活を楽しんでいました」

「収容所のオーストラリア警備兵は、イタリア人の音楽



を聞き、地区で彼等が上演する「トスカ」というオペラに招待されることさえありました。暑い日には、イタリア人地区のリーダー（彼は英語を話せたのですが）を訪ねて、地区の冷蔵庫から出してもらった冷たいミントティーと一緒に飲みました」

ボアマンは、あるイタリア人に、表向きは情報部の掃除をするためということにして司令部に来てもらい、彼とチェスをしながら地区で起こったことについて、情報を集めたものだと回想している。「私は、イタリア人の抑留者については、はっきりとは知らないが、戦争が我々に有利になるにつれ、彼等は釈放されたと思います。でも、カウラである寒い朝のことでしたが、私が駅のプラットフォームに立っていると、列車から300人くらいのインドネシア人の男女、子供が降りてきました。彼等はオランダ領ニューギニアのメラウクにある、オランダ抑留所から来たので、震えながらトラックの到着を待ち、B地区に収容されました」



イタリア人捕虜



「我々にとって、彼等は全く無害でしたが、彼等はインドネシア「自由の闘士」と言われていました。それゆえ、その地区を支配していたオランダ政府が、オランダ領ニューギニアで抑留していたのです」

ライオネルの記録によると、1944年3月17日から25日の間に、次の数の抑留者が、それぞ

れの地区にいた。

「前述の日付と、1944年8月5日（集団脱走）との間にかなり多くの移動があったに違いありません。なぜならば、その日までにインドネシア人がいなくなり、記憶をたどりますと、B地区には1081人の日本兵が、D地区は日本人将校と朝鮮人がいて、フェンスで分けられていました。朝鮮人は明らかに日本陸軍に徴兵された者でした」

1944年3月、松本という名前の朝鮮人捕虜が、日本人捕虜のグループと一緒に収容所に到着した。朝鮮は1910年以来日本の植民地だったので、多くの朝鮮人は日本名を持っていた。松本もその一人だった。結局彼は、日本人地区に入れられた。

B地区のオーストラリア人通訳の協力で、彼は情報部に連れてこられた。熟練した通訳の尋問官が、ブリスベン尋問センターからカウラに来た。

松本は彼に、収容所内で日本人が集団脱走しようと話し合っていることを告げた。この情報のお陰で、警備兵はより良い武装と準備ができた。

A地区	962人	イタリア人
B地区	309人	インドネシア人（ジャワ人）
C地区	1067人	イタリア人
D地区	552人	日本人、88人の朝鮮人と4人の中国人を含む



カウラのイタリア人捕虜。調理の際に出た脂から石鹸を作っている

5

集団脱走前

日本人の下士官兵を収容しているB地区内部の雰囲気は、捕虜となったイタリア軍人の住む地区（AとC）とは、対照的だった。ほんの僅かな例外を除いて、イタリア人は捕虜の身分を苦痛なく受け入れた。彼等は収容所近くの農場で、しばしば監督無しに熱心に働いた。また、食事を楽しみ、自分たちのワインを造り、演奏したり、歌ったりした。彼等の労働グループの帰りが遅くなり、収容所を外界から隔てる重い門が既に閉じられているのが分ると、彼等はどンドンと門の扉を叩いて、中に入れてくれと叫んだ。日本人は、警備兵の監視下でも収容所外で働けるほど信用されていなかったし、オーストラリア警備兵への憎悪をくすぶらせているだけだった。彼らにとって敵に降伏することはどんな形であれ耐え難いものであり、降伏することは、その個人だけでなく、彼の家族全体にとっても恥辱であると信じて育った。彼等は捕虜になるくらいなら、最後の銃弾を自分自身に使うか、敵軍に自殺攻撃をかけた方がいいという非妥協的な教義に取り付かれていた。事実、カウラにいる大抵の日本人は、抵抗できない状態で捕虜になった者、すなわち、負傷していたり、重病だったり、輸送船が沈められて海に放り出されたりした者だった。

初期の日本人捕虜は、撃墜された航空機の搭乗員だった。一時期、彼等はヘイ郊外にある収容所で、日本の民間人抑留者一主として貿易商社の者や真珠採取の潜水夫たちと一緒に収容されていた。彼等は、1942年12月、カウラの新しい収容所に入った。ゼロ戦パイロット南忠男の率いる搭乗員達は、他の捕虜とは違う「クラス」だった。陸軍と海軍のグループとの間でいさかきがあった。陸軍の兵士が数の上では圧倒していたが、実際の権力は人気のない海軍搭乗員が握っていた。

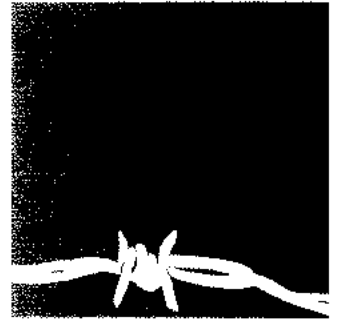
これら2グループ間の緊張が続き口論が起

こった。遂に捕虜のリーダーを決める選挙が強制的に実施された。パイロットの南はリーダーの座を奪われ、金沢彰曹長が取って代わった。小島正男曹長がサブとなり、南はナンバー3の地位を与えられた。これは、主として彼のそこそこの英語を話す能力によるものだった。

日本陸軍が豪北方面の諸島で敗北を重ねるにつれ、捕虜がカウラに殺到し、B地区は著しく過密状態になった。1944年8月初めまでに、捕虜収容所には1104人が入れられ、彼等の管理がだんだん難しくなっていった。

その期間中、捕虜は原始的な武器を蓄積した。それらは、薪の集積所から盗んだ木棒、料理包丁、のみ、園芸用の熊手、鋸、パン切りナイフ、斧の柄、そして野球のバットだった。収容所当局は毎日検査をしていたが、それらが貯蔵されていた小屋の捜査は省略していた。

1943年2月下旬、ニュージーランドのフェザーストン日本人捕虜地区内で事件が発生したが、それは後のカウラ事件にある程度のヒントを与えることになった。1942年12月、ある密告者が、捕虜の労働グループが収容所内で警備兵を襲い、武器



を奪う計画があると打ち明けた。後に、別の密告者が、彼もまた捕虜だったが、地区に火をつけ、消火しようと警備兵が入ってきた所を襲う計画を伝えた。

240名の捕虜による挑発的な行為が続いた後、2月になって収容所の司令官は、兵と下士官を分けて収容すると言って捕虜を脅した。これが、暴力事件の引き金になった。2日後、暴動が起こり、そこで日本人は一以前に自殺の願望を表明していたのだが一大きな石を投げながら、一人の将校と40人の武装した警備兵に突進した。捕虜が将校に触れようとした時、警備兵は発砲し、銃撃は30秒から60秒続いて、日本人捕虜48人死亡、63人負傷という結果になった。



6

集団脱走

次のことは、カウラ捕虜収容所からの集団脱走に関するオーストラリア軍公式レポートの抜粋である。

朝鮮人捕虜により、カウラ捕虜収容所から武器弾薬を奪取し、「敵戦線」の後方において混乱を起こす意図で集団脱走が計画されている、という趣旨の情報がもたらされていた。この結果、収容所周辺における警備隊の火力増強という形の予防処置が追加された。必要があれば、オーストラリア軍新兵訓練所に救援を求める手はずも決められた。

8月4日、収容人数過多の問題が切迫してきたため、B地区司令官は、日本人収容所リーダーの金沢曹長とサブリーダーのパイロット南兵曹を呼び出し、上等兵以下の日本人捕虜は全員8月7日月曜日に、ヘイ捕虜収容所に移送されると通告した。この知らせに南は、「何ということだ。何故我々全員が一緒に行けないのだ」という言葉を返した。

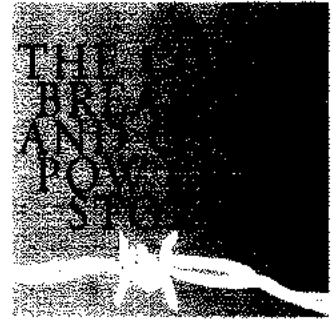
それ以後、その日には何も異常は認められなかったが、次の日の早朝、午前1時半、冴え渡る月明かりの中、日本人の小さなグループが周辺フェンスからおよそ20ヤードの収容所敷地内をうろついているのが目撃された。同じ頃、一人の日本人捕虜が、ブロードウェイに通じる収容所地区の門へ近づいて来た。彼は熱心に何かを伝えようとして、興奮して日本語で話したが、歩哨には理解できなかった。

警備室は知らせを受け、その捕虜を返すため門まで将校に来てもらうよう手配した。しかし、その前にラッパ一声が聞こえ、日本人が自分達の宿舍の戸をあけた。叫び、わめきながら、200名から300名が一つの集団になって、四手に別れて周辺の鉄条網に突進した。

鉄条網に近づいたとき、日本人は「万歳」を叫びながら鉄条網の上に毛布を投げかけ、よじ登ったり、下をくぐったりした。厚手の服を余分に着た者が鉄条網の上に横たわり、その上を別の者が這い上がって外に出た。ブロードウェイにいたオーストラリア人警備兵の小グループは、日本人が大胆にも鉄条網に迫り、ブロードウェイに進出してきたとき、撤退

するよう命令された。警備兵は南門へ行き、そこを通り抜けて門を開け、鍵をかけた。午前1時50分頃、収容所全体に非常警報が出され、オーストラリア軍新兵訓練所は、予め決められていた照明弾の発射による警報を受けた。その後の戦闘の間に、過熱した電線が小銃や機関銃弾で切断されたため、収容所内は真っ暗になったが、間もなく非常灯が点灯した。

ヴィッカーズ機関銃2丁が据えつけられ、B地区に照準を合わせた。一番、二番銃座共に警報が出された後に人員が配置され、脱出を図っている日本人に銃撃を開始した。兵舎近くの位置から射撃していたオーストラリア軍小銃隊員は、数人の捕虜が二番銃座のトレーラーの下に忍び込もうとしているのを見て、彼等に向けて銃火を集中した。そ



れにもかかわらず、数人の日本人がトレーラーによじ登り、ベン・ハーディー等兵を棍棒で殴殺、ラルフ・ジョーンズ等兵を刺した。ジョーンズは中隊の方によろめいて行き、そこで倒れ、その後間もなく死亡した。襲撃中に、ハーディーは機関銃から「発射機構」を取り外し、不作為にして多くの人命を救った。ジョーンズとハーディーは、死後、収容所防衛の際の彼等の勇敢な行為に対して、ジョージ十字章を授与された。



ゼロ戦パイロット豊島兵曹は、ダーウィン初空襲の際撃墜され、L.パウエル軍曹に捕らえられた。豊島は南という偽名を使った。彼は、オーストラリア領内で捕らえられた最初の捕虜だった

他の日本人は、中隊の南東の防御線を襲撃したが、小銃の射撃で蹴散らされた。3人目のオーストラリア人が、その朝死ぬことになる。チャールズ・シェパード一等兵が、B中隊警備詰所から出てきたところを刺殺されたのだ。

ブロードウエーに出た捕虜の2グループは、それぞれ北と南の門を襲ったが、この地域からは誰も脱出しなかった。他の日本人が、将校が収容されているD地区の門を押し開けた。乱入した多くの捕虜が射殺され、一人の日本人将校も死亡した。

この事件全体を通じて、イタリア人捕虜は宿舎の中に留まり、一人の犠牲者もなかった。後で、B地区を調べたとき、その多くが台湾人や朝鮮人からなる138人の「日本人」が宿舎内に残っていた。さらに多くのノドを切られるか、腹に傷のある一遺体が見つかった。その他は、排水溝の中に潜んでいる所を見つかった後投降した。ブロードウエーを呆然とした状態でうろついている者もいた。

陸軍新兵訓練所のハリー・ドンカスター中尉は、再収容作戦中に襲われて殺害された。9日間に334人の日本人脱走者が捕えられ、25人が自殺又は殺害さ

れた。田園地帯に逃げた者のうち、幾人かは自殺し、兵士や民間人に撃たれた者、最高9日間逃亡し続けた者もいた。多くの日本人が、他の日本人によって殺害されたという証言もあった。

殺害されたオーストラリア人の遺体は、オーストラリア戦没者墓地に埋葬された。日本人の遺体は、一時集団墓地に埋葬され、1964年、新しくカウラに造られた日本人戦没者墓地に移され、第二次世界大戦中にオーストラリアで死亡した他の日本人と共に埋葬された。その墓地のある土地は、日本政府に割譲された。

日本人死傷者の合計

将校 1人 死亡

他の階級の者 230人 死亡

将校 1人 負傷

その他3人がその時の負傷が原因で死亡

オーストラリア人死傷者合計

陸軍将校 1人 死亡

警備兵 3人 死亡

警備兵 3人 負傷

7

再収容作戦

集団脱走時に、330人を超える日本人捕虜が収容所のフェンスを乗り越えて外部に逃亡した。彼等は自分の置かれた状況が分らず、突然の血みどろの脱出で方角も分らず、組織や指導者の欠如で混乱しながら行く当てもなく「敵地」で生き延びるには、殆ど備えがないという、厳しい現実を直面したのだった。

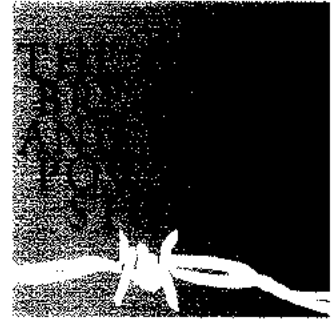
多くのものが再逮捕の危険を冒すよりも、死を選んだ。自殺は、降伏よりも死という武士道を守る名誉の機会を与えるものだった。二人の捕虜は、カウラ郊外で迫り来る列車に向かって頭を線路の上に横たえて死んだ。神戸出身のもう一人の捕虜は、どうして線路に横たわる決心をしたかを語ったが、彼の場合には列車が来なかったのだ。木の太枝に首を吊る者も居れば、自殺するためにごく小さなナイフを使う者もいた。捕まりそうになったとき、喜んで撃たれようとした者もいた。少なくとも二人が民間人に、四～五名が兵士によって撃たれた。しかしながら、集団脱走に際しても生を全うしようとし、48時間以内に大多数の者が投降した。彼らは平和的に、ときおり集団で投降し

た。にもかかわらず、全ての捕虜が収容所に連れ戻されるには、もう一週間が必要だった。一人の捕虜は収容所から50キロ離れたユガウラまでも逃亡していたのだ。

保安上の理由で、政府は集団脱走事件と再収容作戦の詳細に秘密のペールをかぶせた。報道機関はほとんど「闇の中」に置かれた。周辺農場の住民には、軍関係者から簡単な説明があったが、多くの物は事実について全く知らされていなかった。最後の捕虜が再収容される数日前になって、敵意を持った日本人捕虜が未だ逃げ延びているが、全て上手く行っていると知らされた者もいた。

再収容は巨大な作戦になった。武装したオーストラリア空軍機がカウラの上空を周回する一方、捕虜収容所の南東数キロにあるカウラの歩兵兵舎の非武装の訓練生による無数の小グループが、逃亡者を捕まえるために派遣され、その地域を隈なく搜索した。カウラに駐屯しているオーストラリア女性兵大隊も再収容作戦を支援し、地元の病院の医療・看護チームも負傷者や死者の対処にフル活動した。

ハリー・ドンカスター中尉は、再収容作戦中に死亡した唯一のオーストラリア人で、カウラの北11キロの所で日本人捕虜に襲われ、殺害された。これに加えて、



近郊の町プレーニーの住民が、再収容作戦中に車中で暴発したライフル銃の傷が原因で敗血症を起こし、後に死亡した。

集団脱走の日本人指導者は、民間人を襲撃しないように命令し、脱走者は忠実に命令に従った。また、親切心からの純粋な行為のエピソードもいくつかあったが、これらは戦争や戦時中のオーストラリア人の日本人に対する態度からして、考えられぬものだった。そのエピソードの一つは、地域住民のメイ・ウイアー夫人が、二人の日本人逃亡者に紅茶とスコーン（パンの一種）を食べさせるまで、警備兵に二人の引き渡し拒んだというものだ。彼女は次のように主張した。「彼等が敵国人であるかどうかは関係ありません。彼等は何日も飲まず食わずだったのだから、同じ人間として、彼等に最低限の食料を与えるべきです」

40年後、その二人はカウラに戻り、ウイアー家の農場を訪れて、大変親切にもらった家族にお礼を述べた。



シェパード、ハーディー、ジョーンズ各一等兵の葬儀の列



逃亡した捕虜の捜索に戻る前、お茶を飲んで小休止しているネル・ゴールド中尉とジョアン・ケネディー軍曹



8

軍事訓練所 1940～1945

カウラには捕虜収容所があっただけでなく、第二次世界大戦中におよそ7万人を訓練した軍事訓練所もあった。訓練所が設立された数年後、それはカウラ集団脱走に際して重要な役割を果たすことになった。

カウラ軍事訓練所は、カウラの南側、カウラ郵便局から4キロの地点のダービーズ・フォールズ道にある。カウラは1940年初頭に訓練所敷地として選ばれているが、それは町が軍事訓練に必要な全ての施設を備えていたからである。訓練所内には、いくつかの建物からなる区域が8ヶ所あり、それらの全ては自給自足で、独自の調理場、洗濯施設、練兵場、訓練地域があった。4500人から5000人の兵士が居住することができ、テントを使えばそれ以上の人員の収容も可能だった。

それぞれの兵舎は、片方に15人ずつ、30人を受容するように造られていた。兵士は壁に制服を掛け、他の持ち物全てを雑のうに入れ、ワラを詰めたヘッセン式ワラ布団に寝た。1940年9月3日、最初の部隊が入営したとき、訓練所はまだ工事中だった。この部隊はすでに基礎教練を終えて、海外へ展開する前により高度な訓練を受けていた。後年、訓練所は新兵を訓練大隊や連隊に編入して基礎教練を行う場所として使用され、1945年暮れに閉鎖されるまで存続した。訓練所内には工場や工兵、車両輸送など特殊分野の教育のために多くの学校が設置された。

入隊した新兵は、全く新しい生活に直ぐに順応した。起床は午前6時で、直ぐに点呼と短時間の行進が駆け足があった。朝食は午前7時半、毎日の訓練は8時半に始まり、それまでに新兵は、ヒゲを剃り、顔を洗い、兵舎を掃除し、ワラ布団と毛布をたたみ、小銃の手入れをした。訓練は分隊ごとの教練、兵器の取り扱い、行進、野外戦術の他様々な講義からなっていた。昼食

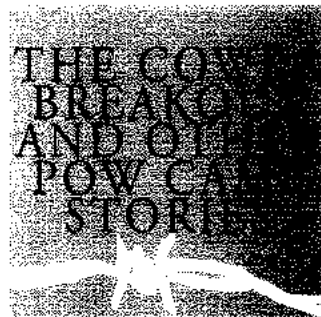
は12時30分、夕食は午後6時からだった。夜間訓練は週に2～3度行われたが、週末は休日だった。

車両輸送訓練隊で訓練を受けるドライバーのテストの一つは、フルトン山の非常に険しい南斜面をトラックで登ることで、オーストラリア陸軍女性部隊の18、19歳の少女が上手に乗りこなすのを見ると、比べ物にならない程下手くそだった。

軍事訓練所は捕虜収容所の運営には関ってはいなかったが、大事件に対する保安対策はなされていた。

陸軍は訓練所区域で最も高いフルトン山の山頂に監視塔を設置した。そこには、昼夜を問わず人員が配置され、必要なときに警報が送れるように、訓練所の他の部署と電話で接続されていた。第19歩兵訓練大隊がフルトン山の南のG地区に駐屯し、集団脱走の夜、その地区を防衛する準備をしていた。

警報が鳴り響いたとき、兵士は素早く飛び出し、配置につき、その夜が明けるまで警戒態勢のままだった。翌日、逃亡した捕虜を捕えるため、軍事訓練所からパトロール隊が派遣された。第19歩兵部隊のドンカスター中尉に指揮されたパトロールの一隊が、カノウインドラ道から少し外れた町の北に捕虜のグループを見つけた。捕虜に近づい



たとき、ドンカスター中尉は襲われ殺害された。

戦争のこの段階までに、オーストラリア政府は、日本軍がその手中にある捕虜を野蛮に虐待していることを知っていた。その為、政府は日本軍が手中にあるオーストラリア捕虜に対し報復行為を招かないよう、日本人脱走捕虜の扱いに細心の注意を払った。その結果、集団脱走に加わった日本人は、本来受けるべき仕打ちよりもずっと良い取り扱いを受け、罰も軽くてすんだ。

1945年8月、第二次世界大戦が終結したとき、陸軍は動員解除を始め、その年の終わりまでには、15人から20人の管理官を除いて、全ての部隊が訓練所を去った。



若い兵士



射撃訓練をする新兵

1946年秋までに、ここの管理官のスタッフは、主に除隊を待っている海外からの帰還兵からなっていた。彼らのうち10人から12人がD地区に居住し、2人のイタリア人捕虜も常住の形でそこに住んでいた。一人は料理人で、もう一人は彼の助手だった。

毎日20人のイタリア人捕虜が、訓練所周辺の雑用をするために、トラックで捕虜収容所から運ばれてきた。

調理を手伝ったイタリア人は、大きな野菜畑を持っていて、キャベツやカリフラワーをたくさん作っていた。それが10人が12人用としては多過ぎることにオーストラリア人は

気付いていたが、彼等はその野菜については深く考えなかった。

捕虜全員が、訓練所との行き帰りにトラックの中で座るため、箱か腰掛を持っていたが、誰もそれを気に留めなかった。毎朝D地区に到着すると、彼等は食事を摂る調理場へその腰掛やコートを持ち込むのだった。午後には、調理場から腰掛を集めて、捕虜収容所に持ち帰っていた。ある日、運転役のオーストラリア兵が、「彼らを急がせるために」調理場に行き、足を踏み入れたとたん、イタリア人捕虜がキャベツやカリフラワーを自分達の箱や腰掛に詰め込んで、あわただしく蓋を開けているのを目撃した。その瞬間、そのオー

ストラリア兵は、なぜイタリア人捕虜があれば多くの野菜を作っているのかを理解したが、イタリア人捕虜は、もう終わりだと観念した。

そのオーストラリア兵は、何も見なかった振りをして「急いでくれ」と言い、間もなく全員がトラックに乗り込んだ。この事件は、野菜を作っていたイタリア人捕虜が、自ら進んで白状したので報告されなかったが、捕虜が大量に持ち帰った後でも、オーストラリア人が食べる野菜は十分に残っていた。

第二次世界大戦後の一時期、訓練所はカウラ移民収容所となった。



恥辱からの旅立ち

他の何にもまして、1944年8月5日の早朝にカウラでおこった悲惨な事件は、恥辱が原因だった。捕虜たちが抱いていたその恥辱は毎日膨らみ続け、もはや耐え難いものになっていた。当時の日本軍人の思想には、捕虜という概念はなかった。それが、自発的に投降する日本軍人が殆どいなかった理由である。捕虜になった者は、負傷や病気で身体が弱って抵抗できなかったか、船が沈んだ後海から救われたため、殆どが止むを得ずそうなったのだった。そして、そのことが、彼等がいったん捕虜になると、非常に多くの者が偽名を使った理由である。彼等は、自分の置かれた恥辱の状態と同じような恥辱を、家族に味わせたくなかったのだ。

どんな軍事行動においても日本兵は捕虜になったことはない、と一般的に信じられていた。だが、第二次世界大戦中にオーストラリアだけでも500人を超える船員を含む、4000人以上の日本人捕虜を収容するようになった。例外なく、彼等が行方不明になったと報告を受けると、家族には戦死したと伝えられた。

1944年9月9日、カウラの集団脱走のニュースと231人の日本人捕虜の死が世界に伝えられたときでさえ、最初、日本側の公式評論は、犠牲者は民間抑留者だったに違いないと主張した。バタビア放送を通じて行われたこの報道への論評は、次のとおりだった。「これら不幸な日本人が捕虜ではあり得ないのは…全く明らかだ。彼等は抑留者だったのだ。なぜならば、日本兵が囚われの身になることを決して容認しないことは良く知られ、受け入れられている事実だからだ」

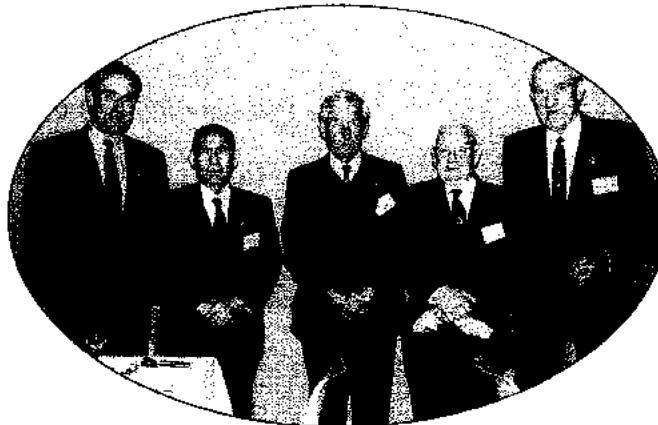
カウラ捕虜収容所の生存者の多くは、自分達の親、妻、後に結婚した女性にさえ、自分が捕虜だったこ

とを言わなかった。

彼等の恥辱の念は続き、そして、多くの場合、それを自分の墓場まで持っていった。

1993年になって、元捕虜の紀川政俊（日本のカウラ会会長になったが）が、彼等が日本に送還されたときの気持ちを次のように要約した。

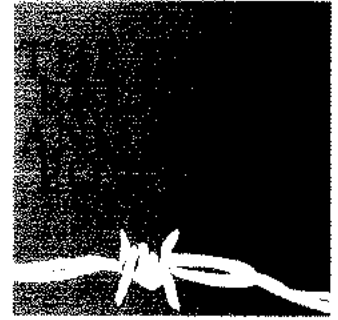
「我々は、男子がいったん捕虜になれば、戦後でさえ、絶望の未来しかないと思った。我々日本に送還された大抵の元捕虜は、何処か無人島のような所へ連行され、日本軍によって銃殺されるものと思っていた。捕虜は、日本人社会に戻ることは望めないとい



1994年集団脱走慰霊祭左から右
ヘロッド・ブルーム市長／森木 勝／アブ・オリバー／
ノエル・ホーン／ティガーことジャームズ

感じていた」

しかしながら、帰国から年月を経るにつれ、非常に多くの元捕虜の態度が変化するようになり、やがて、カウラの事件に関わったことにプライドを持つようになった。そして、1964年10月、カウラ会が生存者の間の同志的感情を発展させるために結成された。会員は、毎年集団脱走記



念日に、日本で集まったり、またカウラへの墓参をし始めたりした。

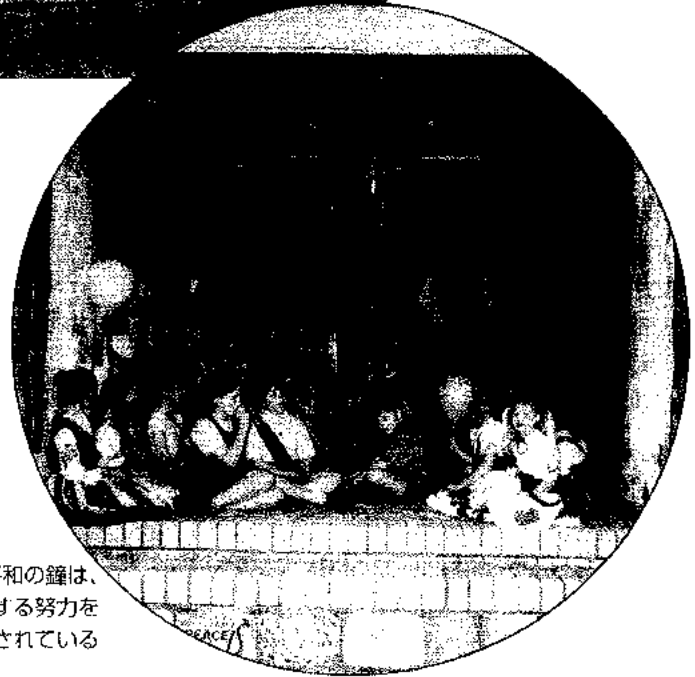
オーストラリア人作家ハリー・ゴードンは、生存者にインタビューするために何度も日本を訪れているが、最近の訪問は1993年10月のことだった。彼は、元捕虜たちの気持ちの変化が時として急速に起こっていたことを知った。搭乗員だった高原希国は、顔では冗談だと示しつつ、自分は「人生の真髄を学んだカウラ学園」であるカウラ大学に通ったことがある、とよく人に話していた。彼にとって、カウラは深い哲学的体験を与え、それによって、自分がより善なる人間に変化していくのを感じたのだ。

オーエン・スタンレー山脈で負傷した森木勝も、自分はカウラで生まれ変わったのを感じた。「カウラと私は精神的絆で繋がっていて、私はそこを訪れる度に（彼は6回墓参をしている）、戦火で倒れた同僚に話しかけるのだ」

高原と森木はカウラ会の会長を務め、共に体験を出版している。



このキャンベラ街にあるカウラ市の歓迎門は、世界の人々の友情の中心であることを強調している



オーストラリアの世界平和の鐘は、カウラ市の平和と和解に対する努力を記念して同市に設置されている



首謀者といわれた金沢彰にとって、プライドを持つ気持ちに向けた旅立ちが遅かった。彼は長年にわたってカウラ会への入会を拒否していたが、遂に昔の戦友に説得された。1993年、彼はゴードンに語っている。「私はカウラを誇りに思うようになった。わたしには、

あのような体験があって嬉しい」
森木は、カウラ会の会長職にあったとき、元捕虜全員に連絡を取ろうとした。後で彼は、およそ800人のカウラ生存者の50%が、自分が捕虜であったことを認めるのを断固と拒否した、と推計している。自ら捕虜であった事実を家族や友人に打ち明けた300人以上の者のうち、わずか80人ほどが

カウラ会に入会して、それを記念しようとしたに過ぎない。

彼はゴードンに、次のように語った。「私は依然として家族に話していない人たちに同情します。今や誰も確かに彼らを説得しようとはしないのですが、問題は、彼等が余り長い間嘘をついて生きてきたことなのです」

行動学習シート



現場見学活動

この解説を伴った現場見学活動シートは、大きな見学団体のグループ活動用の学習プログラムとして作られていますが、小グループや個人用としても利用できます。

見学活動は、この学習シートで「証言地点」と名づけている8ヶ所の捕虜収容所跡地を中心としています。その地点は、次のページの地図に示してあります。

この学習シートの使い方

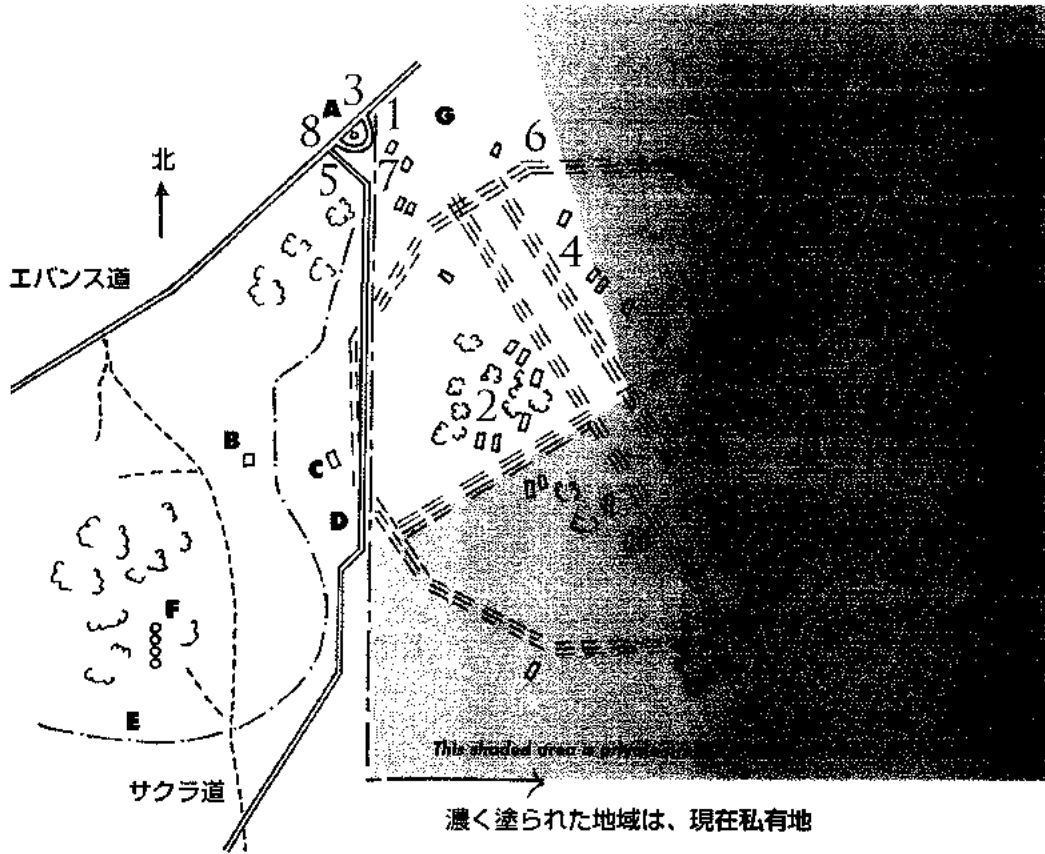
まず、2人～8人までの小グループに分かれ、それぞれに1～4ヶ所の証言地点を割り当てます。証言地点で得られる情報をもとに、各自がこのシートにある証言地点の質問に答えたり、グループの他のメンバーに教えたりします。こうして集めた情報を使って、このシート裏面にある「カウラ捕虜収容所物語」の空欄を埋め、完成してください。

グループで発見した情報と、研究を分かち合うことで、各自の捕虜収容所跡地と集団脱走事件についての解釈と理解が深まります。

シェパード一等兵

写真の写りは悪いが、幸いにこの本文中に彼に関する記述がある

カウラ捕虜収容所跡地踏査マップ



- A. 慰霊の石塚
- B. 収容所跡地に現存する唯一の古い石造りの建物。イタリア人の礼拝堂だったとよくいわれるが、証言によると、収容所ができる前からあった建物で、陸軍が倉庫に使っていたらしい
- C. 大きなコンクリートの平板。収容所内の営倉の跡
- D. 収容所司令部跡
- E. ビニ・クリーク道路に接した「守備隊営門」に通ずる本来の入り口
- F. 4ヶ所の貯水タンク跡
- G. オーストラリア軍兵舎跡
- 病院、調理場、浴場などの跡地に残るコンクリートの遺物

証言地点

証言地点を8ヶ所設定しました。

1. 慰霊の石碑と駐車場に隣接した当初の「赤白」収容所計画の大きな目印
2. A地区跡地の木
3. 慰霊の石塚
4. B地区の近くに立っている「跡地」の目印
5. 旧収容所入り口にある観察台の右手の目印
6. 旧「ブロードウェイ」に近い旧収容所の最初の「跡地」の目印
7. 旧収容所入り口にある観察台の左手の目印
8. 慰霊の石塚の近くの新しく植えられた木や枯れた木

質 問

- 第一地点 収容所ではどの警備隊が警備しましたか？
捕虜の国籍を4つあげなさい。
収容所の広さは？
収容地区の数と収容人員は？
- 第2地点 捕虜が園芸に示した関心について、どのような証拠がありますか？
- 第3地点 何時に「集団脱走」は起きましたか？
捕虜は何で武装していましたか？
彼等は鉄条網を越えるために、どんなものを役立てましたか？
- 第4地点 捕虜は自分達の宿舎をどうしましたか？
なぜ彼等がそうしたと思いますか？
何時に「集団脱走」は起きましたか？
- 第5地点 いくつの捕虜宿舎が無事に残りましたか？
そのとき、勤務中の警備兵であるということは、どういうことだったのか、詳述しなさい。
- 第6地点 「ブロードウェイ」とは何でしたか？
誰がヴィッカーズ機関銃座に配置されましたか？
- 第7地点 どの地区から捕虜は脱走しましたか？
何挺の機関銃が配備されていましたか？
殺された4人のオーストラリア兵の名前を挙げなさい。
何人の捕虜が脱出しましたか？
彼らを再収容するのに何日かかりましたか？
何人の捕虜が殺されたり、負傷したりしましたか？
- 第8地点 誰が収容所の入り口近くに3本の木を植えましたか？
旧収容所入り口の古い枯れ木の表面で、何に気付きましたか？

捕虜収容所物語

1939年、オーストラリアはドイツとイタリアに、そして1941年には日本に対して宣戦を布告して第二次世界大戦に突入した。捕虜収容所は、捕虜にした敵国兵士を収容し、また、当時オーストラリア国内に住み、敵性異邦人と呼ばれた敵国民間人を抑留するために建設された。カウラ捕虜収容所は、そのような収容所の一つで、1941年に抑留所として造られ、後に捕虜収容所になった。

カウラ捕虜収容所は第()守備隊の兵士が警備していた。そして、4カ国すなわち、()()()()の捕虜を収容していた。収容所は、南北、東西およそ750メートルで()と呼ばれる大きな道路で分けられていた。収容所には4地区(A、B、C、D)あり、それぞれは()人の捕虜を収容していた。捕虜は、収容所全体および各地区を区分けするため張り巡らされた鉄条網で、それぞれの地区に閉じ込められた。大抵の捕虜は、収容所生活にこれといった不満はなく、地区内では()を作って、彼等の菜園に大いに誇りを持つ者も多かった。

しかしながら、B地区の日本人は、捕虜になったことを不名誉とし、非常に不満を持っていた。彼等は、捕虜であるよりも、むしろ死を望んだ。

1944年()月()日、午前()時、彼等はB地区から脱走した。ラッパの合図で、自分達の宿舎に()した。「万歳」と叫びながら、彼等はそれぞれ約250名ずつ4手に分かれて鉄条網に突進した。その際、鉄条網を乗り越えるのに()と()だけを使った。武器としては、()と()を使った。2グループが「ブロードウェイ」に突進し、そこで()からの絶

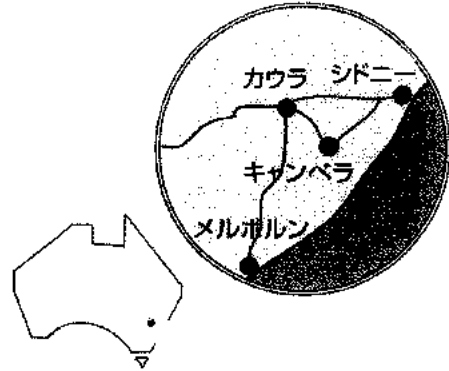
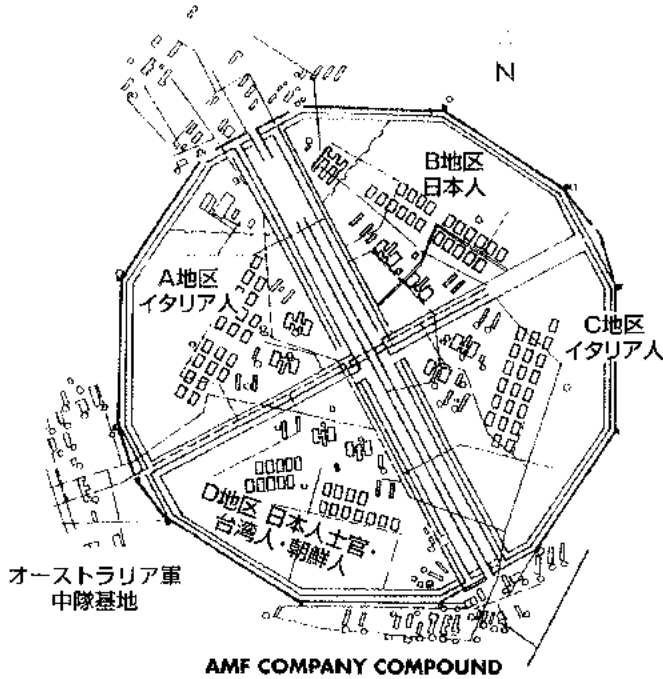
え間のない機関銃の射撃および監視塔や周辺に集まってきた兵士の銃撃を受けた。

ほとんどの()は、「ブロードウェイ」の道路沿いで射殺され、脱出できなかった。しかし、B地区の外側の鉄条網に突進した2グループは、ずっとうまくいった。彼等は、すばやく第2ヴィカース機関銃座を制圧し、そこにいた2人の警備兵を殺害した。

()人以上の者が脱出、カノウインドラやプレーニーへ続く丘を越えていった。結局のところ、彼等は全員捕まった。もっとも、最後の一人が捕まるまで()もかかったのだが。「集団脱走」の犠牲者は、かなりの数に上った。日本人の()人が死亡し()人が負傷した。そして、4人のオーストラリア警備兵が死亡した。すなわち、ハーディーとジョーンズの両一等兵(彼等はヴィッカーズ機関銃座で撲殺された)、シェパード一等兵(彼は「ブロードウェイ」の入り口近くで殺された)、そしてその日の午後、脱出した捕虜の捜索中、待ち伏せを受け殺害されたドンカスター中尉だった。

カウラ捕虜収容所の「集団脱走」は、おそらく現代史上最大の捕虜脱走事件であろう。また、オーストラリア兵士が、本土で敵の地上兵に殺された唯一の例でもある。オーストラリア人・日本人・イタリア人・インドネシア人・朝鮮人など多くの人にとって、それは、悲しみと、信じられない勇敢さを思い起こさせる事件である。我々は、このことを、収容所の跡地を訪れた()の人々の記念植樹や、1944年8月5日の悲劇の傷跡として()を残す、収容所入り口にたっている古い木を見て思い出すのだ。

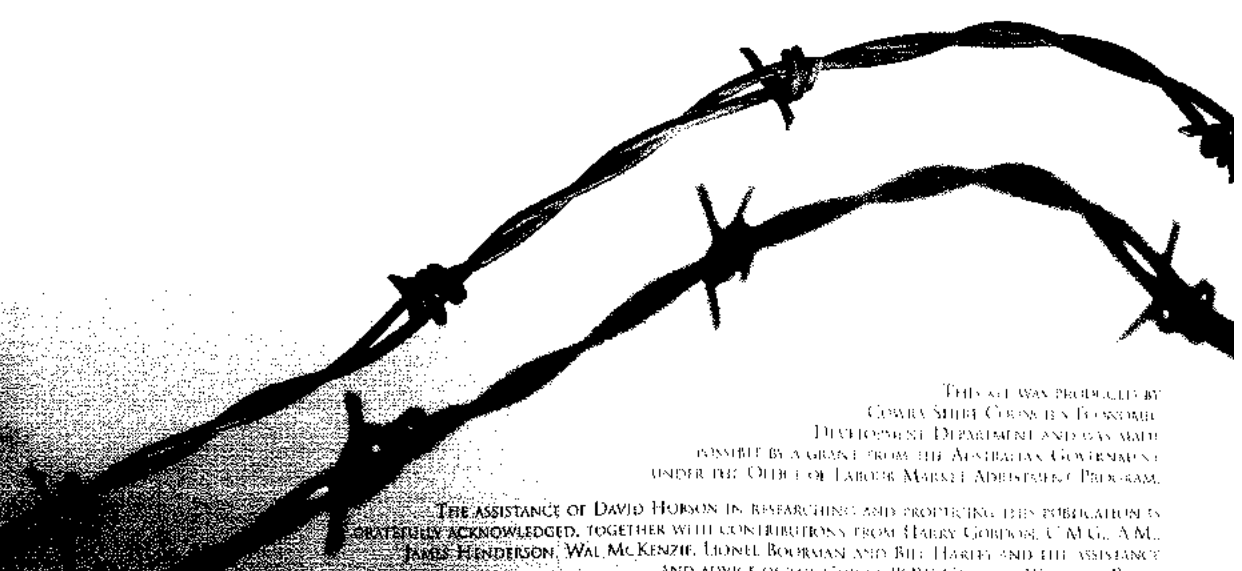
オーストラリア軍中隊基地



カウラ中心街
(南西へ3.2km)

0 75 150 metres

カウラ捕虜収容所見取り図



THIS SITE WAS PRODUCED BY
COWRA SHIRE COUNCIL IN CO-OPERATION
WITH THE TOURISM DEVELOPMENT DEPARTMENT AND WAS MADE
POSSIBLE BY A GRANT FROM THE AUSTRALIAN GOVERNMENT
UNDER THE OFFICE OF LABOUR MARKET ADMINISTRATION PROGRAM.

THE ASSISTANCE OF DAVID HOBSON IN RESEARCHING AND PRODUCING THIS PUBLICATION IS
GRATEFULLY ACKNOWLEDGED, TOGETHER WITH CONTRIBUTIONS FROM HARRY GORDON, U.M.C., A.M.,
JAMES HENDERSON, WAL MCKENZIE, LIONEL BOHRMAN AND BILL HARVEY AND THE ASSISTANCE
AND ADVICE OF THE COWRA POW COUNCIL WORKING PARTY,
COWRA TOURISM CORPORATION AND THE AUSTRALIAN WAR MEMORIAL.

EDITOR: GRAHAM ANDERSON
COWRA SHIRE COUNCIL, PO BOX 342, COWRA NSW 2794 AUSTRALIA
TELEPHONE: (064) 410100 FACSIMILE: (064) 410131

DESIGN: WINDSOR VISUALS - RUSSELL